

英語慣用句の意味解釈について

——日本語の母語話者の解釈方法を中心に——

石田 プリシラ

キーワード：慣用句、英語学習者、解釈方法、思考発話法、母語の使用

1. はじめに

慣用句は話しことばにおいても書きことばにおいても幅広く使われている。例えば (1) は pull s.o.'s leg (「人をからかう、かつぐ」といった英語慣用句の用例である。

- (1) Rosie said, “But now I've left New York, and moved back with my family, to help out as a part-time waitress.” “Now I know you're pulling my leg!” exclaimed Gloria. “Don't tell me you've given up being a fashion model!” (「でも今はニューヨークを離れて、親の店で手伝いをするために実家に戻っているの」とロージーは言った。「冗談でしょう!」と、グロリアは驚いた。「まさかファッションモデルを諦めたんじゃないでしょうね!」)

外国語として英語を学んでいる日本語母語話者は英語慣用句の知識があまり豊富でない場合が多く、文章や会話中で直面した慣用句が理解の妨げになることが多い。しかしながら、このような学習者は様々な方法を用いて英語慣用句の意味を推測しようとすると思われる。

本稿では、外国語として英語を学習している日本語母語話者が、どのような方法で未知の英語慣用句の意味を解釈しようとするのかを検討する。また、様々な解釈方法の中でも特に第一言語（母語）の使用に注目する。

2. 先行研究と残されている問題点

外国語・第二言語学習者の慣用句の解釈方法に関する先行研究はあまり多くないが、注目すべきものとして、次の三つが挙げられる。

● Kellerman (1983) は、外国語として英語を学習しているオランダ語母語話者の母語の転移 (transfer) を検討し、このような転移が (ある英語慣用句と形式的・意味的に

¹ 本稿では、「慣用句」とは単語の二つ以上から構成されている表現であり、「形式的固定性」(石田 1998)、「統語的固定性」(石田 2000)、「意味的固定性」(石田 2004) といった三つの特性を持った表現のことである。「慣用句」の定義と範囲の詳細に関しては、石田 (2004:43) を参照されたい。

類似しているオランダ語の慣用句が存在する場合でさえ) 生じないことを示している。これは、このような学習者には 1) 慣用句は個別言語に特有のものである、2) オランダ語と英語は (例えばオランダ語とドイツ語に比べれば) 言語的な隔たりが大きい、といった認識があるからだとしている。しかし Kellerman は慣用句の例文の容認性に関する調査をもとにこの主張をしており、学習者がどのように英語慣用句を理解しようとするかという問題には直接触れていない。

● Irujo (1986) は、第二言語として英語を学習しているスペイン語母語話者 (上級レベル) の母語の転移を検討しており、翻訳テストや定義の記述から次のことを明らかにしている。

- 1) 上級の学習者は英語慣用句を理解・産出するために母語の慣用句を利用する。
- 2) ある英語慣用句に形式的に類似しているスペイン語慣用句が存在する場合、類似的な慣用句が存在しない場合に比べ「正の転移 (positive transfer)」も「負の転移 (negative transfer)」も多い。

しかし英語との系統関係のない言語を母語としている学習者が、英語慣用句を解釈する際母語の慣用句を利用するかどうかといった問題に関しては、さらなる研究が必要である。

● Cooper (1999) は「思考発話法」(Think-Aloud Protocol) を利用し、第二言語として英語を学んでいる上級学習者が、慣用句を解釈する際に七つの方法を使用することを明らかにしている。これらの解釈方法の中には、「慣用句やその前後文脈について話す・分析する」「慣用句を繰り返したり、言い換えたりする」といった「推測準備方法 (preparatory strategies)」と、「文脈から慣用句の意味を推測する」「句の文字通りの意味から慣用句の意味を推測する」といった「推測方法 (guessing strategies)」が含まれている。しかし Cooper は、学習者が既知の慣用句の意味を思い出す場合と、未知の慣用句の意味を推測する場合を区別しておらず、また、文脈付きの慣用句のみを調査しているのだが、文脈の影響を明らかにするためには、学習者が文脈の付いていない慣用句をどのような方法で解釈するかを検討することが望ましい。

本稿では上に述べた先行研究を踏まえ、外国語として英語を学習している日本語母語話者を対象に、次の問題を検討する。

- ① 日本語母語話者がどのような方法で見知らぬ英語慣用句の意味を解釈するのか。
- ② ①のような解釈方法が慣用句の前後文脈の有無によりどのような影響を受けるのか。
- ③ 日本語母語話者は母語の慣用句・表現を用いて英語慣用句の意味を解釈するのか。用いるとしたら、どのような条件下で母語の慣用句・表現を用いるか。

3. 研究方法

3.1 事前調査

本調査 (3.2) で扱う慣用句を選定するために事前調査を行なった。この目的は、使用頻度の比較的高い英語慣用句、しかも多くの日本語母語話者に知られていない慣用句を選定

することである。まず Collins Cobuild Dictionary of Idioms 及び Longman American Idioms Dictionary から 30 個の慣用句を選んだ。被験者は筑波大学日本語・日本文化学類の二年生と三年生、合計 45 名である。多肢選択式の調査用紙を使用し、各慣用句について「聞いたことがある」、「聞いたことがあるかもしれない」、または「聞いたことがない」を選択してから、各慣用句の意味を知っているかどうかを判定してもらい、既に知っているものの意味を書いてもらった。

事前調査の結果を集計し、「聞いたことがない」及び「意味がわからない」という回答の多かった慣用句を 20 個選定した（【表 4】）²。本稿の目的の一つは「母語の使用」といった解釈方法を検討することであるため、この 20 個の中に、日本語慣用句との形式的類似性のあるものを 8 個入れた。以下に、この 8 個とこれらの意味を解釈するために使用されるだろうと想定した日本語慣用句を挙げる。なお、これらの日・英語のペアの中には、意味的類似性が認められるものもあれば（例えば have an eye for と「～を見る目がある」）、日・英語で全く違う意味を表わしているものもある（pull s.o.'s leg と「～の足を引っ張る」）。

- (2) pull s.o.'s leg（「～の足を引っ張る」）、wash your hands of s.o./s.t.（「～から足を洗う」）、have a thick skin（「面の皮が厚い」）、have an eye for s.t.（「～を見る目がある」）、make your blood boil（「腸が煮えくり返る」）、turn a blind eye（「目をつぶる」）、throw in the towel（「匙を投げる」）、spill your guts（「腹を割る」）。

3.2 本調査

● 材料

事前調査で選定した慣用句の用例カードを二枚ずつ作成した（「文脈あり」「文脈なし」各一枚）。これらの用例カードを二つのファイルに分け、各ファイルに「文脈あり」と「文脈なし」の用例を 10 枚ずつ入れた。ファイル①において「文脈あり」で提示した慣用句は、ファイル②では「文脈なし」で提示し、逆もまた同様にした。ファイル①とファイル②の慣用句はそれぞれの無作為の順にし、「文脈あり」と「文脈なし」の用例を交互に並べた。なお、「文脈あり」の用例はブリティッシュ・ナショナル・コーパスから収集したが、長さや難易度をできるだけ均一にするため、多少手を加えたものもある³。

● 被験者

被験者は、筑波大学日本語・日本文化学類の二年生 20 名である（19～21 歳）。いずれも日本語を母語とする女子学生であり、この調査に任意に参加した。英語学習歴は 7 年 8

² pull s.o.'s leg は「聞いたことがある」といった判定が多かったが（10 名）、この慣用句の意味を正しく定義した被験者は 1 名のみであるので、本稿の対象に入れた。なお、pull s.o.'s leg が「邪魔をする」という意味を表わしているとする被験者が多かったことから（8 名）、日本語の母語話者はこの慣用句を解釈する際に「足を引っ張る」といった母語の慣用句を用いる可能性が高いと想定した。

³ 「文脈あり」の用例は平均 45 語、2～3 文である（本稿の（1）を参照）。

～9ヶ月であり、英語能力は中級の上から上級である。

● 方法

本調査では「思考発話法」を利用した。これは人間の理解の過程を明らかにするための実験方法であり、被験者は数学の問題を解いたり、文章を読んでそれを処理したりするなどの認知的な作業を行ないながら、常に考えていることを口に出していかなければならない (Olson, Duffy & Mack 1984, Davis & Bistodeau 1993, Cooper 1999)。ここでは、この思考発話法を日本語で実施した。できるだけ豊富なデータを得るために被験者に母語を使わせた方が良いと考えたためである (Davis & Bistodeau 1993:461 参照)。

● 手順

1) 「思考発話法」の説明

本調査に入る前に、思考発話法についての説明文 (日本語、A4 一枚) を被験者に渡し、調査者がこれを読み上げた。被験者には、用例を読んでから慣用句の意味に関する推測が完了するまで、考えていることをできるだけ詳しく (休まずに) 話すよう指示した。また、被験者がこう考えるであろうと想定される具体例をいくつか挙げた (「この慣用句の意味は、用例の文脈を手がかりとして推測できるか」、「この慣用句の意味は、この句の文字通りの意味を手がかりとして推測できるか」など)。このような例を挙げたのは、思考発話法を効果的に利用するために、被験者は何について話せば良いのかといった明確な理解がなければならないからである (Olson, Duffy & Mack 1984:284, Davis & Bistodeau 1993:461)。説明文に挙げた例は、本稿の目的と先行研究 (Cacciari 1993, Cooper 1999) に挙げられている例を踏まえたものである。

2) 練習

被験者に思考発話法を説明してから、この方法を練習させた。「文脈あり」の慣用句と「文脈なし」の慣用句を二個ずつ交互に提示し、各慣用句の意味を推測させた。この練習に使用した慣用句は本調査で扱った慣用句以外のものである。

3) 調査

調査は 2005 年 12 月～2006 年 1 月の間に、個人面談といった形で行なった。被験者 20 名を無作為に二つのグループに分け、一つのグループ (10 名) にファイル①の慣用句を見てもらい、もう一つのグループ (10 名) にファイル②を見もらった。それぞれの被験者のペースに合わせて、用例カードを一枚ずつ提示した。被験者はそれを読み、慣用句がどのような意味を表わしているのかについて話した。本調査の「面談」は基本的に被験者の独話であるが、被験者の話を促すために質問をしたり (「今、何を考えていますか」など)、被験者に単語の意味を聞かれた場合その単語の意味を説明したりすることもあった。すべ

ての面談は IC レコーダーで録音し電子ファイルとして保存した。

4. 分析と結果

4.1 発話単位の分析

調査の録音データを文字化し⁴、「発話単位」に分析した。本稿では「発話単位」を基本的に単文、または主節とその主節に接続された従属節からなる複文とする。これは Yorio (1989:60) と Cooper (1999:242) の「最小有限単位 (minimal terminable unit)」、また Davis & Bistodeau (1993:461) の「思考単位 (idea unit)」にほぼ対応するものである。しかしながら本調査のデータにおいては、構造的に単文・複文とは見なせない発話もあった（一語文、文末が省略された形で言い切られた文、間をいれず繰り返された語句など）。このような発話に関しては、話の流れにおける「間」を考慮した上で、「一発話単位」であるかどうかを判断する（宇佐美 2003 参照）。

調査の文字化データの分析例を【表 1】に示す。

【表 1】発話単位の分析例： *a dog in the manger*（「意地の悪い人」）

話者	発話単位	解釈方法
KS10	(manger という単語を指差す) これどういう意味ですか?	RI
調査者	あの、日本語で言いますと、「飼い葉おけ」。	-----
KS10	飼い葉おけ。	RP
KS10	飼い葉おけの中の犬。うーん。	TR
KS10	牧場だと普通の光景なのかな。	DAI
KS10	でも犬が飼い葉おけに入ったらおかしい気がするからそこは居場所じゃない気がする。うーん。うーん。	IP
KS10	「不似合いなもの」、「ふさわしくないもの」、つていう意味だと思います。	IP

4.2 解釈方法の分析

調査の文字化データを発話単位に分けてから、各発話がどのような解釈方法を表わしているかを分析し、解釈方法を分類した。分類する際、慣用句の解釈方法に関する先行研究 (Cacciari 1993, Cooper 1999) と、読解に関する先行研究 (Davis & Bistodeau 1993) に報告されている分類を参考にしたが、本稿では従来の分類にいくつかのものを加える(注 5 参照)。調査で観察された解釈方法とその具体例は【表 2】に示す(次頁)。

今回観察した解釈方法の中には、まず被験者が慣用句の意味を推測せずに慣用句や用例の文脈を読んだり、これらについて話したり分析したりするケースがあった。【表 2】の①から⑧がそれにあたる。被験者はこのような解釈方法を使用しながら、まず(慣用句の意味を推測する前に)慣用句や用例の文脈について考えたり、これらに含まれている言語的

⁴ 本調査の録音データは延べ 20 時間 26 分であり、文字化データは約 249,000 字である(A4 の紙 246 枚)。

【表 2】慣用句の解釈方法

① 用例を読み上げる、語句を繰り返し言う (RARP=Reading Aloud/Repeating) (例) spill the beans “...and promises to spill the beans about their divorce and Yoko...”／
② 単語の意味を聞く (RI=Requesting Information) (例) jump on the bandwagon この“bandwagon”はどういう意味ですか？／
③ 慣用句・用例を訳する (TR=Translating) (例) hit the sack 西に、西に飛行機で飛んで、西に行くと、時間が、gain time、増える？／(原文“When you fly west and gain time...”)
④ 慣用句について話す・分析する (DAI=Discussing/Analysing Idiom) (例) kick the bucket バケツを蹴ると、うるさい。／中に水が入ってればこぼれる。うん。／中に入ってる汚い水がこぼれれば台無しになる。うん。うん。／
⑤ 実世界の共有知識について話す (DWK=Discussing World Knowledge) (例) throw in the towel タオルを投げ出すっていうと、ボクサーが、こう、タオルをしてて、それをぱつと投げて、「行くぜ!」、／いや、違うか、タオルを投げ込むんだ。／タオルを投げ込むと、どうなるんですしたっけ？／
⑥ 文脈について話す・分析する (DAC=Discussing/Analysing Context) (例) a dog in the manger the people of Belize ってなんだ？と思って。／これで「この国の人々」ってことですよ。／これなんかお金の貸し借りに関する国際の問題ですよ、たぶん。／で、まあイギリスがお金を貸してるんですかね、状況的に、そのBelizeに。／あ、貸そうとしているんですかね。／それはちょっとわからないですけど。／
⑦ ある一つの解釈方法を拒否する (RJ=Rejection) (例) pull s.o.'s leg あまりこの二人に「足を引っ張る」とかそういう関係がなさそうなので、「足を引っ張る」じゃないのかな、と思いました。／(=⑬「母語の使用」を拒否)
⑧ メタ言語・メタ認知的なコメントをする (MC=Metalinguistic/Metacognitive Comments) a) えっ...慣用句って直訳ではないですよ。／ b) えー、これってなんかこう、もっと短く答えないといけないんですかね。／
⑨ 慣用句の意味を思い出す (RR=Recalling/Remembering) (例) hit the sack これは、もう、意味わかっているんですよ。／「寝る」ですよ。／hit the sack、これは、よく聞くので。／知り合いがよく言うので。／
⑩ 句の文字通りの意味から慣用句の意味を推測する (IP=Idiom Phrase) (例) jump on the bandwagon 楽隊は賑やかで楽しそうな感じがするから、で、その上に飛び乗るから、「楽しそうなものに仲間入りする」。／
⑪ 実世界の共有知識から慣用句の意味を推測する (WK=World Knowledge) (例) throw in the towel プロレスでタオルを投げるというのは、試合終了というか、諦めろという意味じゃないですか。／あの一、そう、「give up する」みたいな意味じゃないかなと、はい。／
⑫ 文脈から慣用句の意味を推測する (GC=Guessing from Context) (例) shoot the breeze 文脈からただだったら、「和んだ」とか、なんだろう、「和みの場をもうけた」って感じがするんですけど...。／「談笑した」、みたいな感じですかね。／
⑬ 母語の慣用句 (表現) を手がかりとして慣用句の意味を推測する (L1=First Language) (例) pull s.o.'s leg 「足を引っ張る」という日本語の慣用句とすぐ連想しちゃって...／だから、要するに、その、「人のやろうとしてゐることの邪魔をする」とかそういう意味じゃないかなと思いました。／
⑭ 他の英語慣用句 (表現) を手がかりとして慣用句の意味を推測する (L2=Second Language) (例) have an eye for s.t. これは、「このものを見張っておく」とか...／keep an eye for (ママ) something でしたっけ？／あ、あれ keep でしたっけ？／keep でしたねあれは。／have もそんな意味ありましたっけ。／私が聞いたことあるのは keep でした。／それと have が一緒だったような気もするので...／そのものを「見張っておく」とか、「見ておいてね」って意味じゃないかなと思います。／
⑮ 慣用句の意味を推測しない (NG=No Guess) (例) get hot under the collar 全然わかんないです。(苦笑)／なんか、想像しにくいなあ。／全然わかんないです、これ。／

※「／」＝一発話単位の終わり

な情報を整理・処理したりしようとするのである。これに対し、被験者が慣用句の定義を述べたり、何故この慣用句がこのような意味を表わしていると考えたのかについて話したりするものもあった。これは【表 2】の⑨から⑮にあたる。

上のように、観察した解釈方法は二つのタイプに大別できる。これらは Cooper (1999) が提示している二つのタイプにほぼ対応するので、本稿では Cooper の用語を採用し、慣用句の意味を推測せずに用例について話したり分析したりすることに関わる方法を「推測準備方法」、慣用句の意味に関する推測を述べることに関わる方法を「推測方法」と呼ぶ。本調査では被験者がいくつかの「推測準備方法」を利用した後、一つ（以上）の「推測方法」を利用して慣用句の意味を推測するが多かった（【表 1】参照）。なお、④⑤⑥の「推測準備方法」は慣用句の意味推測につながった場合もあれば、つながらなかった場合もあるため、それぞれ⑩⑪⑫から区別する必要がある⁵。

4.3 解釈方法の使用率の分析

解釈方法の分析 (4.2) 後、各被験者の発話単位の総数をもとに各解釈方法の使用率を算出した。解釈方法の数を用いず、その比率を用いたのは、発話単位の総数は被験者間の差が大きかったためである (Davis & Bistodeau 1993:462 参照)。次に、「文脈あり」と「文脈なし」の条件下における各解釈方法の使用率の平均値と、「推測準備方法」と「推測方法」の使用率の平均値を算出した。用例別の分析も上のように行なった。これらの分析の結果は【表 3】に示す (次頁)。

「推測準備方法」において、「文脈なし」の条件で使用率の最も高かったものは「④慣用句について話す・分析する」(.229) である⁶。これに「①用例を読み上げる、語句を繰り返す」(.121)、「②単語の意味を聞く」(.086)、「③慣用句・用例を訳する」(.065) が続く。これに対し「文脈あり」の条件では、「⑥文脈について話す・分析する」(.172) が一位を占め、続いて① (.128)、② (.107)、④ (.102)、③ (.060) と並ぶ。

一方「推測方法」においては、「文脈なし」の条件で使用率の高かったものは「⑩句の文字通りの意味から慣用句の意味を推測する」(.292) と「⑬母語の慣用句 (表現) を手がかりとして慣用句の意味を推測する」(.120) である。「文脈あり」の条件では、「⑫文脈から慣用句の意味を推測する」(.217) が一位を占め、これに⑩ (.109) と⑬ (.056) が続く⁷。

⁵ 本稿の解釈方法の中には先行研究に既に報告されているものが多いが、【表 2】の③、⑦、⑪、⑭、⑮は本稿で設定したものである。本稿で「③慣用句・用例を訳する」が観察されたのは、本調査が日本語で行なわれたことや、被験者がこれまでの英語教育において訳読をすることが多かったことに関連していると思われる。⑦、⑪、⑭、⑮はいずれも使用率の低いものであるが（【表 3】）、これらは本稿で観察した他の方法とは性質の違うものであるので、別個の項目として設定することが必要であると考えられる。なお、「⑭他の英語慣用句 (表現) を手がかりとする」は、第二言語として英語を学んでいる学習者なら使用率が高くなると予測できるが、このことに関してはさらなる研究が必要である。

⁶ ここでは被験者別の使用率のみを挙げる。

⁷ Cooper (1999) の解釈方法の使用率と比較のこと（「文脈あり」、用例別の使用率のみ）。「慣用句やその前後文脈について話す・分析する」.24、「単語の意味を聞く」.08、「慣用句を繰り返す言ったり、言い

【表 3】各解釈方法の使用率

	被験者別使用率		用例別使用率	
	文脈なし	文脈あり	文脈なし	文脈あり
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)
●推測準備方法				
①RARP	.121 (.078)	.128 (.102)	.142 (.033)	.176 (.045)
②RI	.086 (.044)	.107 (.052)	.065 (.037)	.099 (.043)
③TR	.065 (.032)	.060 (.062)	.064 (.033)	.088 (.035)
④DAI	.229 (.098)	.102 (.057)	.251 (.119)	.094 (.046)
⑤DWK	.023 (.036)	.013 (.019)	.031 (.097)	.015 (.025)
⑥DAC	-----	.172 (.074)	-----	.173 (.033)
⑦RJ	.006 (.012)	.012 (.018)	.006 (.014)	.010 (.014)
⑧MC	.009 (.017)	.004 (.006)	.010 (.017)	.005 (.008)
計	.539 (.109)	.598 (.148)	.570 (.147)	.659 (.091)
●推測方法				
⑨RR	.010 (.023)	.005 (.008)	.008 (.017)	.005 (.011)
⑩IP	.292 (.104)	.109 (.083)	.262 (.124)	.084 (.054)
⑪WK	.020 (.021)	.005 (.008)	.012 (.038)	.004 (.011)
⑫GC	-----	.217 (.074)	-----	.186 (.048)
⑬L1	.120 (.036)	.056 (.042)	.127 (.135)	.054 (.077)
⑭L2	.012 (.026)	.002 (.005)	.016 (.036)	.002 (.006)
⑮NG	.007 (.018)	.008 (.015)	.005 (.009)	.006 (.014)
計	.461 (.109)	.402 (.148)	.430 (.147)	.341 (.091)

※n = 20、網掛けで「文脈あり」・「文脈なし」の使用率に有意差が見られたものを示す。

【表 3】でわかるように、各解釈方法は「文脈あり」「文脈なし」によって使用率が異なる。この違いが統計的な有意差であるか否かを調べるため、各解釈方法に対し反復測定による分散分析を行なった（被験者別・用例別）。まず「推測準備方法」だが、「④慣用句について話す・分析する」は「文脈あり」の条件における使用率の方が「文脈なし」よりも低く、有意差が見られる ($F_1(1,19)=41.633, p<.001$; $F_2(1,19)=31.093, p<.001$)⁸。この結果は、上に述べた「⑥文脈について話す・分析する」の使用率が高かったことに関わっていると思われる。被験者は「文脈なし」の条件では慣用句そのものに注目して話すことが多かったのに対し、「文脈あり」の条件では文脈に注目して話すことが多く、慣用句について話すことが相対的に少なくなったのである。なお「⑥文脈について話す・分析する」は「文脈なし」の条件では使用されないで、これに関しては分散分析が実施できないが、

換えたりする」.07（以上「推測準備方法」）、「文脈から慣用句の意味を推測する」.28、「句の文字通りの意味から慣用句の意味を推測する」.19、「慣用句に関する背景知識を使用する」.07、「母語の慣用句を手がかりとして慣用句の意味を推測する」.05、「その他」.02%（以上「推測方法」）。

⁸ 被験者別分析の F 比は「F₁」で示し、用例別分析の F 比は「F₂」で示す。有意水準は 5%とする (p<.05)。

⑥が「文脈あり」の条件では使用率の最も高い推測準備方法であったことは重要な分析結果と見なす。

他の「推測準備方法」の中では、用例別の分析のみで文脈の有無に関わる有意差が見られたものもある。「①用例を読み上げる、語句を繰り返し言う」は「文脈あり」の条件での使用率が「文脈なし」での使用率に比べて高く、有意差が見られる ($F_2(1,19)=5.910, p<.05$)。「②単語の意味を聞く」に関しても同様である ($F_2(1,19)=12.583, p<.01$)。これらの結果は、「文脈なし」の用例に比べ「文脈あり」の用例の方が、言語的情報が多いことと関わっていると思われる。「文脈あり」の用例を解釈するには被験者は考える時間の確保、またそこに含まれている言語的情報の整理・処理のために用例を読み上げたり、繰り返し言ったり (①)、また知らない単語の意味を聞いたり (②) することが多かったのである。この①と②に関しては被験者別の分析で有意差が見られなかった (つまりこれらの解釈方法の使用率は被験者間の差が大きかった)。そのため、上に述べた①と②の分析結果は④の分析結果に比べれば多少弱いということになる。

「推測方法」に関しては、「⑩句の文字通りの意味から慣用句の意味を推測する」は「文脈あり」での使用率の方が「文脈なし」のそれに比べて低く、有意差が認められる ($F_1(1,19)=65.583, p<.001$; $F_2(1,19)=55.755, p<.001$)。「⑬母語の慣用句 (表現) を手がかりとして慣用句の意味を推測する」 ($F_1(1,19)=24.230, p<.001$; $F_2(1,19)=13.531, p<.01$) と「⑪実世界の共有知識から慣用句の意味を推測する」 ($F_1(1,19)=6.954, p<.05$) にも同様である。ただし、⑪は被験者別の分析のみで有意差が見られた⁹。

上の結果は、「⑫文脈から慣用句の意味を推測する」の使用率が高かったことに関わっている。被験者は「文脈なし」の条件では慣用句の文字どおりの意味や母語の慣用句・表現、また実世界についての共有知識を手がかりとして意味を推測することが多かったのに対し、「文脈あり」の条件では文脈から慣用句の意味を推測することが多かったため、⑩⑪⑬の使用率は相対的に少なくなったのである。なお「⑫文脈から慣用句の意味を推測する」は、上に述べた⑥と同様に「文脈あり・なし」を条件とした分散分析が実施できないが、⑫が「文脈あり」の条件では使用率の最も高い推測方法であったことは重要な分析結果である。

「推測準備方法」と「推測方法」といった大きなカテゴリーに関しても、反復測定による分散分析を行なった。「推測準備方法」は「文脈あり」の条件での使用率が「文脈なし」での使用率に比べて高く、有意差が見られる ($F_1(1,19)=5.893, p<.05$; $F_2(1,19)=10.441, p<.01$)。反対に「推測方法」は「文脈あり」の条件での使用率が「文脈なし」のそれに比べて低く、これも有意差が認められる ($F_1(1,19)=5.893, p<.05$; $F_2(1,19)=10.441,$

⁹ ⑪は用例別の分析で有意差が見られなかったのは、この方法の使用率は慣用句間の差が大きかったことを意味する。文字化データを調べると、この方法は少数の慣用句に関してしか用いられなかったことがわかる。例として、鯀が本来白身の魚であることから red herring は「異常、奇妙」という意味を表わすと推測したり、ボクシングで敗北を認めるしるしにリングにタオルを投げ入れることから throw in the towel は「諦める」ことを表わすと推測したりすることが多かった。

p<.01) ¹⁰。これらの差は、「文脈あり」の用例は「文脈なし」のものに比べ言語的な情報が多いことに関わっていると思われる。「文脈あり」の場合、被験者はまず用例を読み上げたり、用例中の単語の意味を聞いたり、文脈について話したりするなどして用例の文脈を処理するための解釈方法を使用することが多かったのに対し、「文脈なし」の場合は慣用句以外の言語的な情報がないため、上のような解釈方法の使用が相対的に少ないのである。

以上の分析から、英語を学習している日本語母語話者は未知の慣用句を解釈する際様々な解釈方法を使用することがわかった。また、これらの解釈方法の中には、その使用率が文脈の有無に影響を受けるものもある。なお、以上のほかに、被験者の推測の正答率に関する分析も行なったが、紙幅の制限のためこれは割愛する。

5. 「母語の使用」について

4.3 に述べたように、「⑩母語の慣用句（表現）を手がかりとして慣用句の意味を推測する」は「文脈なし」の条件では二番目に、「文脈あり」の条件でも三番目に多く使用された推測方法である。本節では、この方法（以下、「母語の使用」とする）について検討する。

用例別使用率のデータを見ると、母語の使用率が相対的に高い慣用句もあれば、低い慣用句もある。【表 4】は、本調査で扱った英語慣用句を母語の使用率の高いものから順に示したものである（次頁）。

まず「文脈なし」の用例では、被験者は次のような日本語慣用句・表現を用いて英語慣用句の意味を推測していた（紙幅の制限のために 1～10 位のみ挙げる）。

- (3) 1) pull s.o.'s leg / 「～の足を引っ張る」、2) make your blood boil / 「血が沸騰する」、「頭に血がのぼる」、「腸が煮えくり返る」、3) have a thick skin / 「面の皮が厚い」、「厚顔無恥」、4) wash your hands of s.o./s.t. / 「～から足を洗う」、「～に手を染める」、「～から手を引く」、5) have an eye for s.t. / 「～を見る目がある」、6) shoot the breeze / 「暖簾に腕押し」、7) spill your guts / 「心臓が飛び出る」、8) throw in the towel / 「白旗を掲げる」、「暖簾に腕押し」、9) hit the sack / 「袋叩きにする」、10) turn a blind eye / 「聞く耳を持たない」、「悟りを開く」。¹¹

(3) でわかるように、被験者は英語慣用句を解釈するため、様々な日本語慣用句を用いている (3.1 (2) と比較のこと)。また、これらの英語慣用句との形式的類似性のある日本語慣用句を用いることが多かった ((3) 1～5、9)。have an eye for s.t. (「見識がある」と pull s.o.'s leg (「人をからかう、かつぐ」) については次の (4) (5) のような推測があ

¹⁰ 「推測準備方法」の F 比、p 値と「推測方法」のそれが同じであるのは、「推測準備方法」の使用率と「推測方法」の使用率は補完的な相互関係にあるからである（【表 3】参照）。

¹¹ (3) に挙げた日本語の句の中に、一般に「慣用句」と見なされていないものがある（例えば「血が沸騰する」と「心臓が飛び出る」）。本稿では、これらは多くの話者に用いられていることを重視し、取りあえず「日本語の表現」と呼ぶことにする。

った。

- (4) わたし、これ、さっき最初に見たときに、なんだろう。／なんか、「見る目がある」
 っていう、そういう意味なのかなと思って、日本語で。／
- (5) はい、「他人の足を引く」なんて、日本語に「足を引っ張る」っていう表現がある
 ので、それと同じ意味かなって思います。／「他人の邪魔をする」とか。／¹²

【表 4】母語の使用率（用例別）

順位	文脈なし		順位	文脈あり	
	慣用句	母語の使用率		慣用句	母語の使用率
1	pull s.o.'s leg	.548	1	make your blood boil	.267
2	make your blood boil	.308	2	have a thick skin	.192
3	have a thick skin	.270	3	pull s.o.'s leg	.165
4	wash your hands of s.t./s.o.	.246	4	wash your hands of s.t./s.o.	.132
5	have an eye for s.t.	.190	5	have an eye for s.t.	.110
6	shoot the breeze	.181	6	spill your guts	.040
7	spill your guts	.120	7	between the devil and the deep blue sea	.037
8	throw in the towel	.113	8	kick the bucket	.036
9	hit the sack	.104	9	throw in the towel	.035
10	turn a blind eye	.102	10	leave no stone unturned	.028
11	pull strings	.082	11	pull strings	.017
12	between the devil and the deep blue sea	.073	12	a dog in the manger	.009
13	a dog in the manger	.065	13	turn a blind eye	.008
14	spill the beans	.052	14	red herring	.005
15	get hot under the collar	.036		keep tabs on	.005
16	kick the bucket	.025	16	hit the sack	.000
17	keep tabs on	.014		get hot under the collar	.000
18	red herring	.006		jump on the bandwagon	.000
19	leave no stone unturned	.000		spill the beans	.000
	jump on the bandwagon	.000		shoot the breeze	.000

※「文脈なし」と「文脈あり」はそれぞれ n=10

一方で、被験者が英語慣用句との形式的類似性を持たない日本語慣用句を使用してその意味を推測するケースも見られた。その一例として shoot the breeze（「談笑する」）に「暖簾に腕押し」を関連づけ、この英語慣用句が「張り合いがない、何も反応がない」ことを表わしていると推測した被験者が多かったことが挙げられる（5名）。被験者は、shoot the

¹² (4) と (5) のように、被験者が「日本語で～と言うので…」、「日本語に～という表現があるので…」、「～とか、日本語で（も）言う」などの表現を用いて、母語の慣用句・表現を手がかりとして英語慣用句の意味を推測していることを明確に示した場合が多い。

breeze の文字通りの意味から沸いてきた心的イメージに「暖簾に腕押し」を連想し、これをもとに shoot the breeze の意味を推測したと思われる。throw in the towel に対する「暖簾に腕押し」や、turn a blind eye に対する「悟りを開く」に関しても同様である。

次は「文脈あり」条件下の解釈を見てみよう。4.3 に述べたように、「文脈あり」での母語の使用率は「文脈なし」のそれに比べて低く、有意差が見られる。【表 4】に示した各慣用語での条件別の平均値を比較すると、この差は明らかである。例を挙げると shoot the breeze に対する母語の使用率は、「文脈なし」では.181 であるのに対し、「文脈あり」では.000 である。特に注目すべきは、「文脈あり」の条件では英語慣用語と無関係の意味を表わしている日本語慣用語を用いることが相対的に少なかったことである。上の例に一、二加えると、「文脈なし」の条件では hit the sack (「寝る」)、spill your guts (「心を打ち明ける」) に対してそれぞれ「袋叩きにする」、「心臓が飛び出る」が用いられたのだが、「文脈あり」ではこれらの日本語慣用語が用いられることはなかった。

以上から見ると、「母語の使用」は文脈の存在により制限されるとも思われるが、本調査では「文脈あり」の条件においてもこれは三番目に多く使われた推測方法である。「文脈あり」の条件では、次の英語慣用語に対する母語の使用率が相対的に高かった (1~5 位のみ挙げる)。

- (6) 1) make your blood boil / 「血が沸騰する」、「血が煮えたぎる」、「頭に血がのぼる」、
- 2) have a thick skin / 「面の皮が厚い」、「厚顔無恥」、
- 3) pull s.o.'s leg / 「~の足を引っ張る」、
- 4) wash your hands of s.o./s.t. / 「~から足を洗う」、「~に手を染める」、
- 5) have an eye for s.t. / 「~を見る目がある」、「~に目を向ける」。

被験者データを考察すると、「文脈あり」における母語の使用は二つのタイプに大別される。第一に、「㊸母語の使用」と「㊹文脈の使用」を合わせて慣用語の意味を推測するものである。(7) のように、被験者は母語の慣用語を手がかりとして英語慣用語の意味を仮定し、その後用例の文脈を用いてその仮定を確認することがあった。

- (7) (make your blood boil 「人を激怒させる」) 最初、この、これだけを見たときは、血が…、なんか、血が沸騰するとか、頭にくるとか、そういう意味かなと最初思いました。(L1) / なんだろう。ぼろもうけとかそういう感じですか?(DAC) / 要するに、なんか、あまりにもぼろもうけとかすることですよ。(DAC) / 汚い…やりかた…。うーん。(DAC) / やっぱり、そうすると、腹を立てるとか、血が沸騰するというイメージなので、まず、カーと腹がたつ。(GC) / こういうやり方は、腹立っても十分 [当然] みたいな。(GC)

また、文脈から英語慣用語の意味を推測した後に、母語の慣用語を用いて推測を裏づける

こともあった(用例省略)。上のような解釈方法の組み合わせは、英語慣用句と意味的類似性のある日本語慣用句が存在する場合に多かった (make your blood boil、have a thick skin、have an eye for s.t.)¹³。

第二は、「㊸母語の使用」のみで英語慣用句の意味を推測するケースである。このような例は、被験者が慣用句の文脈を完全に理解できなかったり、文脈を無視したりする場合に確認された。(8) は文脈を理解できなかったケースである。

- (8) (pull s.o.'s leg) 私の足を引っ張っただったら、ファッションモデルを諦めたのはグロリアになっちゃうから…(DAC)/えー、なんだろう、意味が通じない。(DAC)/邪魔したじゃないのかな。(DAC)/えー、なんかつじつまが合わなくなった。(DAC)/っていうか、足を引っ張った、邪魔するから抜けられない。(L1)/なんか意味は通じないけど、邪魔をするっていう意味じゃないかと思います。(L1)/

上のように、「文脈あり」の条件においても、被験者が英語慣用句と無関係の意味を表わしている日本語慣用句を用いることがあったが、このようなケースは少なかった¹⁴。

6. まとめと今後の課題

6.1 まとめ

本稿では次のことを明らかにした。

- ① 日本語母語話者は様々な方法を用いながら未知の英語慣用句の意味を解釈する。(4.2)
- ② 解釈方法の中には、文脈の有無により影響を受けるものがある(4.3)。
- ③ 日本語母語話者は、日本語と英語に言語的な系統関係がないにも関わらず、日本語の慣用句・表現を手がかりとして英語慣用句の意味を解釈する場合がある(5節)。英語慣用句と形式的類似性のある日本語慣用句を使用することが多いが、類似性のないものを使用することもある。また、「文脈なし」の条件は「文脈あり」の条件よりも母語の使用率を高める。

¹³ 「文脈あり」と「文脈なし」の条件下で用いられた日本語慣用句を比較すると、前者の日本語慣用句は問題の英語慣用句に比較的近い意味を表わしている場合が多い。例えば 1) spill your guts (「心を打ち明ける」)、2) throw in the towel (「諦める」)、3) turn a blind eye (「無視する」) に関しては、「文脈なし」では 1) 「心臓が飛び出る」、2) 「暖簾に腕押し」、3) 「悟りを開く」が用いられたのに対し、「文脈あり」では 1) 「腹を割る」、2) 「匙を投げる」、3) 「目をつぶる」/「見て見ぬふりをする」が用いられた。このことから、被験者が「㊸母語の使用」と「㊹文脈の使用」を合わせて英語慣用句の意味を推測していることが窺える。

¹⁴ Cooper (1999) は「文脈あり」の条件下での母語の使用に関して、これが正しい意味解釈につながる場合のみを報告しており、母語の使用が誤った意味解釈につながる可能性に触れていない。

6.2 今後の課題

① 正答率の分析

本稿で扱った慣用句の意味解釈の正答率を分析し、各推測方法の効果を検討することが必要である。これまでの分析から、「文脈なし」(.134)の条件に比べて「文脈あり」(.445)の条件は正答率が高いことがわかる ($F_1(1,19)=37.870, p<.001$)。また、最も効果的な推測方法は「⑩文脈から慣用句の意味を推測する」といった方法であるが、これは他の推測方法を伴って使用されることも少なくない。

② 慣用句の「解釈の可能性 (interpretability)」と文脈の有無

Grant and Bauer (2004)によれば、英語慣用句には「比喩的慣用句」と「典型的慣用句」の二種類があるとされる。前者は英語学習者が自らの「語用論的な能力 (pragmatic competence)」を用いて解釈できる類のものであり (get hot under the collar など)、後者はこのような語用論的な能力を用いても解釈できない類のものである (shoot the breeze など)¹⁵。ただし、「比喩的慣用句」の意味を解釈するため、前後文脈が必要な場合もある。

本調査の、これまでの正答率の分析から言うと、「文脈なし」の条件では上のような「比喩的慣用句」も「典型的慣用句」も正答率が相対的に低い。これに対し、「文脈あり」の条件では両者ともに正答率が相対的に高い。このことから、慣用句の「解釈の可能性」と、文脈の影響を分けて検討することが必要であると思われる。また、非母語話者が未知の慣用句を解釈する際、「解釈の可能性」による影響よりも文脈の有無による影響の方が大きいと思われる。この問題に関してもさらなる研究が必要であるが、今後の課題としたい。

【参考文献】

- Cacciari, C. (1993) The Place of Idioms in a Literal and Metaphorical World. In C. Cacciari & P. Tabossi (Eds.), *Idioms: Processing, Structure, and Interpretation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 27-55.
- Cooper, T. (1999) Processing of Idioms by L2 Learners of English. *TESOL Quarterly* 33(2), 233-262.
- Davis, J. & L. Bistodeau (1993) How do L1 and L2 Reading Differ? Evidence from Think Aloud Protocols. *The Modern Language Journal* 77(4), 459-472.
- Grant, L. & L. Bauer (2004) Criteria for Re-defining Idioms: Are We Barking up the Wrong Tree? *Applied Linguistics* 25(1), 38-61.
- Irujo, S. (1986) Don't Put Your Leg in Your Mouth: Transfer in the Acquisition of Idioms in a Second Language. *TESOL Quarterly* 20(2), 287-304.
- Kellerman, E. (1983) Now You See It, Now You Don't. In S. Gass & L. Selinker (Eds.), *Language Transfer in Language Learning*. Rowley, MA: Newbury House, 112-134.
- Levorato, M.C. & C. Cacciari (1999) Idiom Comprehension in Children: Are the Effects of Semantic Analysability and Context Separable? *European Journal of Cognitive Psychology* 11(1), 51-66.

¹⁵ この二つは Levorato & Cacciari (1999) の「意味的分析可能な慣用句 (semantically analysable idioms)」と「意味的分析不可能な慣用句 (semantically non-analysable idioms)」に類似する。

- Nippold, M. & S. Tarrant Martin (1989) Idiom Interpretation in Isolation versus Context: A Developmental Study with Adolescents. *Journal of Speech and Hearing Research* 32, 59-66.
- Olson, G.M., S.A. Duffy & R.L. Mack (1984) Thinking-Out-Loud as a Method for Studying Real-Time Comprehension Processes. In D.E. Kieras & M.A. Just (Eds.), *New Methods in Reading Comprehension Research*. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 253-286.
- Yorio, C. (1989) Idiomaticity as an Indicator of Second Language Proficiency. In K. Hyltenstam & L.K. Obler (Eds.), *Bilingualism across the Lifespan*. Cambridge: Cambridge University Press, 55-72.

石田プリシラ(1998)「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5: 43-56. 筑波大学文芸・言語研究科 応用言語学コース

石田プリシラ(2000)「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7: 24-43. 国立国語研究所

石田プリシラ(2004)「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として—」『国語学』55 (4): 42-56. 日本語学会

宇佐美まゆみ(2003)「改訂版: 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13~14 年度科学研究費補助金基盤研究 C (2) 研究成果報告書、4-21. 東京外国語大学外国語学部

【辞書】

Sinclair, J. (Ed.) (2003) *Collins Cobuild Dictionary of Idioms*. Glasgow: HarperCollins Publishers.

Urbom, R. (Ed.) (1999) *Longman American Idioms Dictionary*. Essex: Pearson Education Limited.

【付記】

本稿の統計的な分析を行なうにあたり、宮本エジソン先生とエルウッド・ジェームズ先生より貴重な御意見をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお、本稿における不備や誤りは、当然、筆者の責に帰せられるものである。